

シュンペーター

資本主義・社会主義・民主主義

1942

Joseph Alois Schumpeter
Capitalism, Socialism, and
Democracy

本書が最初に世に問われた一九四〇年代は、社会主義は実現可能か否かという問題を巡って、多くの経済学者が議論を戦わせていた時期であった。他の経済学者は、市場のない社会主義国家で経済計算の基礎となるべき価格を決定できるのかという問題に議論を集中したが、シュンペーターはこの論争に対して異なったアプローチをした。つまり、社会主義国家の成立は、それが資本主義国家を動かしている重要な「エンジン」を代替することが可能か否かということにかかっていると考えたのだ。資本主義のエンジンとは何か。シュンペーターはそれを「企業家精神」として示した。前作『経済発展の理論』（一九二二）で示されたこの概念は、既存の資源を再結合して新しい利潤機会を作り出す能力と気質のことを指す。企業家精神は一般的には、市場競争がある資本主義社会特有の属性として考えられている。しかし、シュンペーターは、この機能が資本主義の発展とともに組織内部に取り込まれるようになり、官僚的機能によって代替されてしまうことを指摘した。さらに独占経済において、成功したブルジョワジーは、自分たちの利益保護のために国家の政治的介入を必要とするようになる。官僚化された独占企業と国家の結びつきは、必然的に資本主義的性格を衰退させ社会主義へと変質していくのである。

さて、シュンペーターは社会主義国家で民主主義が実現可能かという問題に進む。彼は、これを取りあえず肯定する。しかし、彼は同時に、民主主義の理想を達成するための政治制度は、必ずしも民主的である必要はないというパラドックスを突きつける。むしろ、民主的でない政治制度の方が人民の幸福に貢献し得たという歴史的事例すら存在すると言う。シュンペーターは民主主義は目的ではなく意志決定の手段

資本主義はやがて
社会主義へと変質する

ヨゼフ・アロイス・シュンペーター (1883~1950)

ウィーン大学に学び、ボン大学教授などを経てアメリカに渡りハーバード大学教授に就任する。アメリカへの近代経済学導入に重要な役割を果たした。代表作として『理論経済学の本質と主内容』(1908)、『経済発展の理論』(1912)などがある。

●『資本主義・社会主義・民主主義』(中山伊知郎・東畑精一訳、東洋経済新報社)

であると考えた。つまり、民主主義も数ある政治制度の一つに過ぎないのだ。実際の政治過程の中で、民主的と言えるのは、せいぜい自分たちの支配者を自分たちの手で選ぶことができるということに過ぎない。選出された政府が「人民の幸福のため」に非民主主義的方法を採ることはむしろ必然であるとも言える。社会主義が実現可能であるのは、この限りでの民主主義である(これは資本主義国家でも同じである)。しかし、ここで気をつけなければならないのは、逆に民主的な方法で選ばれた政府が、必ずしも民主的な目的のために働くとは限らないという命題も成り立ちうることである。ナチス・ドイツが民主憲法の下での選挙によって選出されたことは周知の事実であろう。シュンペーターは、資本主義や社会主義という現代の経済システムを観察することによって、民主主義というわれわれが日頃、金科玉条のようにあげている政治制度を痛烈に批判しているとも言える。

本書は一九五〇年に第三版が出版された。第二次世界大戦中に出された初版と比べて第二次世界大戦後の世界の観察が加えられている。急速なソ連の成長、東欧圏や旧植民地国の社会主義化は、アメリカ資本主義の繁栄にもかかわらずシュンペーターの主張を確固たるものにした。

資本主義が社会主義に変質するのは必然であるとしているにもかかわらず、彼は決して社会主義に共感しているわけではない。本書を通貫しているのは、冷静で論理的な経済学者の視点である。彼は資本主義のもつ多くの問題を批判するが、多くの社会主義者のように社会主義国家に幻想を抱いているわけではなかった。彼の予言は、少なくとも今のところ実現していない。だが、彼が指摘した企業家精神の制度化、国家と結びつく企業といった考え方は、まさに法人資本主義という現代社会の描写として正鵠を射ているであろう。この考え方は、彼が理論的に多大な貢献をした近代経済学よりも、むしろ、ヒルファアーディンクなどのオーストロ・マルキシズムに近い。時代の流れは必ずしもシュンペーターの考えたようにはならなかったが、彼が超長期的視点から描き出した経済と政治の関係は、半世紀を経てなおわれわれに社会理解のための雛形を与えてくれるのである。

▼江頭進